

久留米の自然



2006年10月1日

第94号

アキアカネ トンボ科アカネ属

撮影場所

筑後川中流

撮影時期

2003年9月

撮影者

橋本 哲男

アキアカネ

河内 俊英

「赤とんぼ」として知られるトンボは、赤い色のトンボの総称でアカトンボと言う名前の種は存在しません。アキアカネは、トンボ科アカネ属に分類される赤とんぼの1種ですが、俗にアキアカネを赤とんぼと呼ぶこともあります。日本の特産種で、氷河期に日本列島に入ったと考えられ、中国大陸からヨーロッパにかけては、近縁なタイリクアキアカネがいます。その関係からアキアカネは暑さが苦手で、夏になると山岳地帯に移動して平地からは姿を消し、秋に真っ赤に成熟して戻ってきます。人里で良く知られている赤とんぼで、アキアカネに良く似たナツアカネがいますがナツアカネはずっと平地にいます。

アキアカネが夏の7～8月に山岳地帯に移動する理由は、活動中の体温上昇が高く、外気温より10～15も上昇するが排熱能力が低いことから暑さに弱く避暑のために山岳地帯へ移動

すると考えられています。したがって、冷夏の年にはそれほど高地へは行かず、暑い夏には標高の高い所に移動することが知られています。高地で採集してマーキングして放し、秋に平地で再度採集された実験もあります。

アキアカネは秋になって秋雨前線の通過時期に大群で里に戻って来ますが、オスは鮮やかな赤色になっています。稲刈りの終わった田んぼの水たまりなどの産卵場所を雌雄連結して探し、浅い水たまりを見つけると交尾して連結したまま産卵します。産卵は、雌が水面や水際の泥を腹部先端で繰り返し叩き、数個づつ産卵します。親は11月まで飛翔し、個体によっては12月まで生存しています。

卵は水中や湿った泥の中で越冬し、春先の水田に水を張る時期に孵化して、幼虫(ヤゴ)になります。

久留米の蝶34

イチモンジセセリ

国分 謙一

秋、庭や野山に小さな花が咲くと、小型で見栄えのしない色彩の蝶が吸蜜に訪れていますが、ほとんどの方はそれを見ても気にも留めない（気が付かない？）と思われるほど地味な蝶です。飛ぶスピードが早く瞬間的に来て花に止まりますが、花に止まって吸蜜始めると花が小さいのですぐに隣の花に移動しますが、そのときはぴょんと跳ねるように移動します。

稲作の発展につれて？

イチモンジセセリは東南アジアに広く分布していて、日本は北限の産地となります。北海道まで棲息していますが、北海道では夏の終わりから秋にかけて見られるそうで、冬には死滅してしまい、日本で冬を過ごすことが出来るのは近畿地方までと思われています。久留米市でも春先には非常に少ないので、多くは死んでいるのではと思われまます。

幼虫の主な食草はイネ科で水田の周りを含めて調べると、特にイネを好み多数発生しているそうです。これらのことから稲作が始まる弥生時代以前は日本では非常に少なかったのではないかと、稲作を行ったから現在のように個体数が増加したのではとの説があります。

集団移動

古くから生物の集団移動が知られており、移動の理由がよく分からないレミング（ねずみの一種）食料を求めての移動であるアフリカ大陸のヌウ（ウシの仲間）の大移動、昆虫では飢餓の原因にもなったことのあるバッタ（飛蝗）秋になると北アメリカからメキシコまで移動する蝶のオオカバマダラなどが有名です。これに劣らずイチモンジセセリは集団で移動することが知られていますが、普段から目立たない小さな蝶なので、昆虫研究者以外の方には蝶も集団移動するものが生息していることがあまり知られておりません、また昆虫研究者も気を付けて

見ないと移動していてもほとんど気付かないようです。ただあまりにも多いとニュースになるようで1952年の神奈川県松田での移動が概算で18億匹や1930年（昭和5年）の大阪での移動（数は報告されていないが余りの多さに大騒ぎしたとある）1957年の東京では皇居を通過し天皇陛下も見られた等が知られていて、他に小規模な移動の報告が数多くあります。この集団移動は多くの昆虫研究者が色々調査されていて、大阪市立自然史博物館に居られた日浦勇がまとめてあり、それによれば移動場所は関東から山口県まで知られ、夏から秋にかけて東から西に向かって飛び、生まれてすぐの新しく、体重が移動しない個体よりも軽いなどの違いがあるそうです。バッタでは高密度で発生すると、形態や行動に差がでることがロシアの研究者によって確認されていて、イチモンジセセリも同じように高密度で発生したときに移動固体が生まれるのでは？と思われています。私も集団移動は見たことがありませんが、ただ単に気が付かないだけかもしれません。観察された報告を見ますと移動している最中の固体は、その時移動していない個体と較べて飛び方に差があるそうです。

久留米市での観察

久留米市では少ないですが5月上旬から見られますが7月頃から少しずつ多くなり9月は非常に多い、11月上旬頃まで市内各地の小さな草花で吸蜜している状況はどこでも見られます。小さくて色彩が地味なうえに飛ぶ速度が速いので気付かれないかも知れませんが、小さな草花をよく見ると発見できます。止まっている時の、閉じた後ろ翅に並ぶ小さな4個の銀紋が一列に並んでいるのが目印です。



ゴミの不法投棄の監視

米田 豊

仕事柄野外調査に行く機会が多く、また、県の環境保全指導員を委嘱されているので不法投棄の監視に努めている。不法投棄の現場に出くわす事は稀であり、発見場所はそのつど関係行政機関へハガキで通知している。

しかし、お役所仕事と言うか、住民の判断では分からない管轄を巡って対処の遅れや不法投棄者捜査中と言う名目で放置されるので、必ず後日回収の有無の確認に出かけている。また、引ったくりや空き巣などの犯罪被害と思われる投棄品は警察に届けている。犯罪者は元より、成人向きの本、テープ、グッズなどから、いわゆる変質者や愉快犯などの徘徊も伺い知る事が出来、監視は犯罪防止や治安に役立つと思っているが、何かあれば土地勘の有る私が一番疑われるかも知れない。

これまでの幾つかの悪質な事例を挙げてみる。小郡市稲吉の宝満川河川敷に家電製品が大量に不法投棄・焼却して有り、身元が分る書類があったので小郡市役所に通報したところ、後日産業廃棄物業者が警察に検挙され、河川敷への入り口にサクが設置された。稲吉橋から天の川大橋までの左岸堤防道路は駐車可能な広い所も有り、河川敷には竹藪が繁るので不法投棄が絶えない。家庭一戸分のあらゆる物が投棄されていた事もあった。

高良川の一ノ瀬砂防堤堰下流にスチール机やイスなど多数の大型不燃物が捨てられていた。増水時に障害物としての危険性が大きいため、行政機関に早急の回収を要望したが、2ヶ月余経過し、その対応に不満が残った。

宮ノ陣アルカディアパーク北端の通学路でビデオテープが散乱し始めて気になり、拾って見ると成人向きの物であり、周囲を調べると一段高くなった空き地に段ボールや袋に一杯のテープや本が投棄されていた。中学校近くの場所柄、市に即時回収を要望したが、結局私が直接清掃部業務課へ搬入した。

生き物に魅せられて

ミドリヒョウモンの巻 松永 紀代子

2004年9月の中旬、筑紫野市の天拝山での探鳥会の帰り道、シャクナゲ谷の沢沿いを歩いていた。

すぐにヒラヒラと飛ぶ大型の蝶が目にとまった。地味な翅の色、ツマグロヒョウモンではないことは歴然だ。チョウはサクラの幹に止まった。ミドリヒョウモンだ。あ、産卵だ。腹を曲げて幹の苔に1個ずつ産み付けていく。こんな木の幹に産卵するとは、食草のスミレでなく、離れたところに産卵すると何かで読んだことがあるが、木の幹とは思いつかなかった。下から時計周りにぐるぐると卵を産みながら2mくらいまで上ると、また下におりて産卵しながら上っていく。

なぜ幹に？小さな食草よりも卵にとって安全なのだろうか？不思議だな。

ひととき 動物笑話 その39 カワウソの芸

「同じイタチ科なのになぜラッコ君だけが人気があるの？」仰向けに浮かんで腹の上で貝やカニなどを石で割るのが受けるのよ」「私達もお世話になっている動物園のために何か芸をマスターしようよ」「群れで行動するからシンクロナイズスイミングはどう？」「良いアイデアね。日本は世界的にトップクラスだからお客さんも喜ぶわよ」「でも自信ないわ、脚が短いから」「W杯で盛上がったサッカーは出来ないけど水球はどう？」「バタフライ競泳などもいいと思うけど」「それは先日、宗君と和香さんがトライしたけれど、肩を壊したそうよ」「それはかわうそ～」
*カワウソは体長約70cm、尾長約46cmで、旧北区の水辺に生息し、魚やカエルなどを捕食している。毛皮が良質のため乱獲され、日本では高知県下に残存するのみで、絶滅の危機にある。特別天然記念物。

(Y.Y)

高良川流域のキノコ(その1)

角 正博

前号でサンコタケを紹介しましたが、今まで高良川流域のキノコはほとんど紹介されたことがなかったと思います。私は苔類の調査の合間に、今関六也先生に時々キノコの標本を送って見てもらっていた程度で、菌類の専門ではありませんが、最近出会ったキノコについて、数回にわたって紹介してみたいと思います。

高良川流域のキノコは、生態的に 高良山、明星山の中腹から尾根にかけての山地および中流域の正源寺池周辺の丘陵に広がる広葉樹林、特にシイ、カシ林とつながりの深い菌根菌や木材腐朽菌を中心としたキノコ菌、針葉樹林、特に流域の大半を占めるスギやヒノキ林とつながりの深い木材腐朽菌を中心としたキノコ類、

公園や路傍などどこにでも発生する腐生菌を中心としたキノコ類に大きく分けられると考えています。かつて高良川上流域の山地の中腹から尾根や、正源寺池周辺の丘陵はアカマツ林でマツタケ狩りも行なわれていました。しかし高度経済成長による生活の変化に伴い、放置されてシイ・カシ林やクヌギ林となったり、伐採されてヒノキの植林地となったりしたため、現在の高良川流域では、マツタケ等のアカマツ林特有のキノコを見ることはできません。現在、流域の森で豊かなキノコ相を楽しめるのは、シイ・カシ林です。今回はシイ・カシ林を彩るキノコを二つ紹介したいと思います。

1 カンゾウタケ(肝臓茸) *Fistulina hepatica*

この和名は、その形態と色彩によったものです。鮮やかな濃赤紅色の色彩と獣の肝のような形態は、種々のキノコ写真集でお馴染みですが、高良川流域では温石谷等で見た程度で、しばしば出会えるキノコではありません。やや暗い林

内で鮮やかな血紅色の幼菌を見つけた時は、ちょっと感動しました。根株腐朽菌のため、スタジイ等の地際部や地際から遠くない位置の樹幹に発生するようです。樹幹の窪みから生えるので、傘は扇形または舌状となり、付け根は狭まり短柄状または無柄で、キノコを傷めないように採取するのに苦労します。傘の表面は濃赤紅~暗赤褐色、肉は血紅色で、触ると獣肉のように赤い汁を出し、まさに「肝臓茸」の名前にぴったりです。

2 アイタケ(藍茸) *Russula virescens*

このキノコも種々のキノコ写真集でお馴染みです。大型のハツタケ類で、傘の緑色~灰緑色の味わい深い色調は、暗い森の中で時に青磁のような気品を漂わせていて、人目を引きます。クロハツモドキの白とも黒ともつかない曖昧な色調やシロハツ類の汚白色と比べると、アイタケは傘の表皮が不規則な多角形にひび割れて、かすり状の模様を表すことで、色彩の単調さを逃れ、一層趣き深い印象を与えています。アイタケの持つ硬質の気品は、オキナクサハツなど他のハツタケ類にもろく壊れやすいものが多いのに比べて、アイタケは幼菌の時からかなり堅めで、キリッと凛々しい感じを与えるところに由来するようです。そのためか虫に食われて内部の白い肉が見え、欠けた茶碗のような姿になっても意外とがっちりしています。



カンゾウタケ

生ごみのダンボールコンポスト処理に挑戦

福田 万里子

市が募集したダンボール箱を利用した生ごみ処理に参加して1ヶ月半経ちました。まず、箱の中に籾殻燻炭とピートモスと少し小さく切った生ごみを入れてよく混ぜ、蓋をした上に古Tシャツで作った虫よけのカバーを付けるだけ。大量のごみを入れても、数日放ったらかしにしてもちゃんと発酵して温度が上がり、虫が湧いてもごみと一緒に何時の間にか消えていきます。悪臭もなく、不精な私には最適でござります。

生ごみによる「元気野菜づくり」

橋田 沙弓

「元気野菜づくり」の吉田俊道氏（長崎県佐世保市出身）の講演をどろんこ幼稚園で、見学し吉田先生（九州大学農学部大学院出身）の成長点を生かし、生きた微生物、菌類による土壌の活性化のみずみずしい昔なつかしい元気野菜づくりが出来るという感動的なお話に感銘を受けました。私もやってみようと思えました。2年前から、久留米市山本町耳納「ふれあい農園」の1区画を借りて作っていました。しかし、何となく熱が入りませんでした。そこで、生ゴミと、腐葉土を混ぜて、1日目、3日目、5日目、1週間後、そして2週間放置して畑に入れることにしました。そのほかに畑の雑草や終わった作物も小さく破碎して、畑にすきこみ、貝殻石灰もたくさんまきました。それから、マルチも土壌にかけました。

それから、春野菜の植え付けは苗物にしました。トマト、ナスビ、ゴーヤ、ピーマン、オクラ、キュウリなど、あとはサツマイモやサトイモも植えました。いきおいがよいのはキュウリ、ピーマン、ナスビ等。

土壌がよければ、生き生きとして虫がつきにくい、こまめに手入れをしました。お米のとき汁もペットボトルにためて畑に運びました。雨が多い夏、秋にサトイモも、ぐんぐん大きな

りました。

今まで生ごみは捨てていたのが宝物になり堆肥になりました。新しいEM菌「えひめAI-2」をつくり、それをもとに「ぼかし」もつくりたいと考えています。



元気野菜づくりの畑

故小林会長の緑の祭典の賞状と楯を息子さんの繁氏から会へ奇贈

8月17日、故小林実会長の息子さんから、相談したいことがあるということで、すぐ、お宅にお伺いしました。それは、昭和57年4月3日に近見敏之市長と、くるめ緑の祭典実行委員会、龍頭文吉郎会長からの賞状と、大きな楯でした。内容は自然保護の啓発活動と緑豊かな住みよい街づくりに貢献となっています。これは次期会長へ代々継承します。(S.H)



楯

例会報告

第333回例会・ホタルの夕べに参加して

古賀 信夫

6月10日(土)高良内公民館においてホタルの夕べが開催された。参加者は約20名で、家族連れで参加された方もあった。

最初に当会の米田副会長によるホタルの話があり、ホタルの種類や一生について、また、ホタルについての疑問質問に答えるという形で話は進み、より深くホタルについて理解できるとともに、ますますわからない事が増え、昆虫の世界の不思議さを感じた。

その後、午後8時過ぎから数台の車に分乗して、高良川上流、寺尾谷付近まで現実のホタルを見学にでかけた。この日は例年にくらべて温度も湿度も低いようであり、出現数は少ないようであったが、それでも、漆黒の闇の中に飛ぶ光は幻想的な雰囲気醸し出すものであり、参加者全員言葉を忘れてみとれていた。

当会が例年ホタルの観察を行っている高良川上流寺尾谷付近は、以前よりホタルが大量に発生する場所であり、特徴としては樹木の周りを下から上へと螺旋状に渦巻きながら飛ぶということである。残念ながら今年はこのような光景はみられなかったが、一時ホタルの数が極端に減少したときに比べれば少しずつではあるが増えているようなので、数年後にはまたホタルの螺旋が見られることになるであろう。

ホタルは童謡などにも登場するように、以前より私たちに身近な存在であった、しかし昨今では時間をかけて山の中にまで出かけて行かないと出会えないと聞く。しかし、ここ高良川では久留米市内からそう遠くないところでホタルの乱舞を見ることができる。これは、久留米にはまだまだ人と自然が交わる里山が残されていることの証左ではないかと考える。今回の例会に参加して、この貴重な財産を大切に守らなければならないことを痛感した。

第333回例会

ホタルの夕べに参加して

城島町 原 岩義

自分は、今回初めて参加させて頂きました。ビデオ鑑賞でホタルの生態を詳しく学ぶことができました。ホタルは幼虫の時から光するという事、ホタルの生息環境や条件を知る事ができ、ホタルに対する想い・興味が強くなりました。

現地に行き実際に見て、久留米市内から、それほど遠くないのに、たくさんのホタルを身近で見ることが出来、改めて自然の神秘・尊さ・大切さを感じる事が出来ました。

残念な事は、ホタルの数が昔より減っている事、河川の護岸工事などによりコンクリートだらけになっている事、ゴミの処分場の建設・増加です。人間のエゴにより自然を壊し自然の生態系をも壊している現実です。

人間は、自ら生きていく上で絶対に必要な水・空気・太陽の光を失おうとしている。地球上で一番愚かな動物は、人間であり、又、一番賢い動物も人間だと想います。

だからこそ、今、自然を守り、創る事をしなければいけないと強く想います。

未来の子孫の為に、自然を守り、水、空気、光を守らなければ、いけないと想います。

その為には国民一人、一人が自然に対する意識を高める事が一番大切だと想います。

そして、子供に正しい教育をする事が大切です。現在の日本は、毎日、親が子供を殺す子供が親を殺すというような報道が跡を断ちません。人間の生態系にも異変が起きていると自分は、想います。



ビデオでホタルの生態について学習する

第335回例会

高良川水辺の自然観察会

7月23日(日)午前9時、筑後川発見館くるめウスにおいて、筑後川まるごと博物館と共催で水辺の自然観察会が行われた。

この日は高良川こども探検隊から13名、山川子どもネイチャーゲーム教室から12名の参加者があった。予報通りの雨が降り出したので、久留米の自然を守る会から、行徳氏の昆虫の幼虫や標本を見せながらのお話、尾花氏の話や河内氏のビデオによる「動物の擬態」放映とお話など、やっと雨が止んだので、1時間ほど、くるめウス前のさくら橋下の高良川下流の自然観察を行った。事前にお魚班(山川)、昆虫班(行徳)、植物班(橋田)に分かれていたので、グループにまとまって行動した。最初にゴムでできたラバー堤の観察をした。雨のためラバー堤は空気をぬいて下流側に倒れていたが、あらかじめ、川底に降りて水温と気温を測定しました。次に透視度計で濁っているかどうか透視をしたら、透視度100で水はきれいでした。

次に各班でどんな生物にであったか調べてみました。

昆虫班:ウスバキトンボ、キダラカメムシ、シヨウリョウバッタ(幼虫、不完全変態の為)イラカの幼虫、ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ 7種

植物班:シロツメクサ、ヤハズソウ、セイタカアワダチソウ、ヨモギ、ブタナ、アレチハナガサ、オオバコ、タチズメノヒエ、アメリカスズメノヒエ、アゼガヤツリ、ヒメクグ、ヤマイ 12種

お魚班:川の水嵩が深く、水流が速いため、危険で中にはいれませんでした。水生生物も調べることも出来ませんでした。

雨が降り出したのでくるめウスに戻り、各班でまとめをしました。植物班は標本作成を。くるめウスを有効に活用出来ました。(S.H)

第335回例会

雨の水辺観察会

山川子どもネイチャーゲーム教室

笠 徳子

18年度は山川子どもネイチャーゲーム教室を立ち上げましたが7月には梅雨で、ぐずついた天気が続き野外での活動がなかなかできずに困っていました。今回くるめウスでは雨でも出来る内容だったので傘をさして野外に出かけ、水辺の観察をすることができました。河川の中洲が表れる程の水深で気温27.3、水温19.4で透視度は100でした。最初梅雨時の川の観察は増水の恐れがあり危険では?と思っていたのですが、ラバー堤があり増水になるとしぼんで水を流す仕組みになっていました。高良川下流では筑後川に合流する地点に空気をためたラバー堤で河川水をせき止め浄化施設で浄化しているとの事。以前聞いたことはあったのですが、実際にどのような仕組みなのかは初めて知りました。百年公園の片隅にそんなしくみがあるとは驚きでした。観察の後、昆虫や野生動物、環境問題のビデオ上映を鑑賞しましたが、自然界の中での循環やつながりを実体験から知っているのはとても大切なことだと思いました。



先生の話を聞く子ども

《行事案内》

第337 回例会:

ネイチャーゲームと自然観察会

高良内から四季の森を通り森林公園へ行きます。行きも帰りも自然観察とネイチャーゲームをします。秋の自然を満喫しましょう。皆様お誘いのうえご家族もご参加ください。

〔日 時〕: 10月15日(日) 9:00~15:00

〔集合・解散〕: 高良内幼稚園駐車場 9:00、15:00

〔参加費〕: 無料

〔共催〕: くるめネイチャーゲームの会・市農林課

第338 回例会:

キノコと自然探訪ときのご鍋会

6月が雨のため中止となり11月に計画。高良内コースから、四季の森~林道~森林公園へいきます。指導は金子周平先生(森林林業技術センター)です。定員20名まで。

〔日 時〕: 11月26日(日) 9:30~15:00

〔集合・解散〕: 高良内幼稚園駐車場 9:30、15:00

〔参加費〕: 200円 *きのご鍋も準備

〔共催〕: 市農林課

第339 回例会:

冬の探鳥会と自然観察会

冬の自然観察をしてみましょう。生き物は冬のためにどんなすごし方をしているのか見てみましょう。

〔日 時〕: 12月10日(日) 9:30~15:00

〔集合・解散〕: 高良内幼稚園駐車場 9:30、15:00

〔参加費〕: 200円 *だご汁も準備

〔共催〕: 日本野鳥の会筑後支部・市農林課

第340 回例会: 総会と講演

2007年度の総会と猪上信義氏(県森林林業技術センター)の「郷土の自然」の講演を予定しています。日時: 平成19年1月13日(土)

《事務局だより》

今(9月上旬)ニュースになっているのは、皇族に待望の男子誕生のことだ。天皇は公に「女はなれない」と明言されている唯一の職業(?)らしく、今回の男子誕生までは皇室典範の見直しが必要と盛んに論じられていたが、これで一息ついたとばかり有耶無耶になっているようだ。昔は女性天皇もいたが、今のやり方に決める時にはそれなりに議論され反対意見もたくさん出ていただろうに、いったん決まってしまうと経緯は忘れ去られ改革を受け入れるのは難しいようだ。現状が過去の選択の結果だとしたら、今、私達の選択はどんな未来をもたらすのだろうか。

ホームページを変更しました。

「久留米の自然を守る会」ホームページ

<http://kurumenoshizen.net>

(金原優子)

1. 会員消息(入会)

香月スミエ・緒方徳子(久留米市)

2. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。また、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

3. 原稿募集

次号95号は平成19年1月1日発行予定です。原稿の〆切は12月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

4. 幹事会のご案内

幹事会(定例)は原則として毎月第1水曜日の19:00~21:00まで、西町教育集会所で行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(10月4日、11月1日、12月6日)

久留米の自然

平成18年10月1日 第94号

発行 久留米の自然を守る会

発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0851

久留米市御井町1595-9 金原優子方

TEL・FAX 0942-44-1942

印刷(有)プリンティング コガ

TEL 0944-88-0027 FAX 0944-88-0029